

〈書評〉

牧野広義著

## 『マルクスの哲学思想』

(文理閣、二〇一八年、本体二七〇〇円)

石川 康 宏

本書のタイトルでもある「マルクスの哲学思想」について、著者は「序章」でこう述べている。「マルクスは、資本主義社会の経済法則を明らかにするとともに……社会運動の発展の必然性や、資本主義経済の法的規制の必然性を明らかにし、さらに労働者階級の人間の発達の必然性を明らかにした。そしてここから、資本主義社会の矛盾と、その変革の可能性を論じた」。「マルクスのこのような研究の基礎には、明確な哲学思想がある。それは、現実

をリアルに分析して、その中に含まれる矛盾をとらえ、その矛盾を原動力としてダイナミックに発展する社会の姿をとらえる思想である。それがマルクスの唯物論的な弁証法である」。本書はこうした問題意識から、(1)マルクス独自の「新しい唯物論」、(2)それをもとにした「史的唯物論」、(3)『資本論』に活かされた唯物論的弁証法、(4)『資本論』における人間と社会にかかわる哲学的諸問題を論じている。以下、マルクスの主に経済学に学んできた評者

が、強く関心を引かれた論点を中心に内容を紹介したい。

著者によって主題の第一とされた「新しい唯物論」は、第3章「新しい唯物論——世界の変革の哲学」における「フォイエルバッハにかんするテーゼ」の検討で集中的に明らかにされている。フォイエルバッハや青年ヘーゲル派への批判を直接念頭しながらも、マルクスがそこで行ったのは古代ギリシアから近代に至る哲学との批判的対決であり、そこには「存在論、認識論、実践論、宗教論、人間論、社会論にわたる哲学の諸問題」についてのマルクス独自の提唱があった。著者はその内容を第1章「若きマルクスの哲学研究」、第2章「プロレタリアートと疎外された労働」の検討の上に展開し、新しい唯物論を、古い「観察」の哲学およびブルジョア社会を受容する哲学と対比し、新しい実践の哲学およ

び「将来社会」（著者は未来社会をこう呼ぶ）に向かう変革の哲学ととらえている。

いわゆる「初期マルクス」を軽視せず、「テーゼ」そのものもつ価値をそこにいたるマルクスの具体的な研究の到達点として理解することの方法は、「初期」から『ドイツ・イデオロギー』以後『資本論』にも及ぶより成熟したマルクスに通底する問題意識や思想を明らかにする上で重要な意義をもって

いる。

第二の「史的唯物論」については、第4章「史的唯物論の確立」で、『ドイツ・イデオロギー』がマルクスより前の古い抽象的な人間一般の哲学を、新しい具体的で歴史的な哲学すなわち現実的な生活過程の哲学に飛躍させたことを明らかにし、さらに『経済学批判』の「序言」を検討した第5章では、「革命的理論家」としての自身の経歴

を明示しながら、人間社会の「構造と生活過程を唯物論的に把握」し、その変革と変革に必要な物質的条件すなわち「将来社会」を担いうる新しい階級の形成をここで「定式」化したとする。

くわえて注目されるのは、先の「テーゼ」にも登場し、右の「定式」ではブルジョア社会をもってその「前史は終わる」とされた“die menschliche Gesellschaft”の意味を、第6章「人間社会」とは何か」で本格的に究明している点である。これを「人間社会」や「人類社会」と訳し、資本主義以前を人間社会の「前史」、共産主義以後をその「本史」ととらえた河上肇以来の通説的解釈の無理を指摘した上で、著者はこれを資本主義の次に来る「人間の社会」と訳し、それによって「疎外や物件化や物神崇拜を克服して、人間が真に主体となる社会」など、マルクスが探究した「将来社会」の内容

をより正確に、より豊かに捉えることを提唱する。これもきわめて重要な提起である。

第三の『資本論』に活かされた唯物論的弁証法については、第7章「『資本論』における唯物論と弁証法」で、商品分析での量・質・尺度・本質・現象・実体・反省や、資本を価値増殖過程の主体ととらえる点などに、ヘーゲル弁証法の研究成果が活かされているとする一方、意識の唯物論的な解明が『資本論』の重要課題になっているとして、科学的認識としての反映、社会的存在による規定と反映、物神崇拜としての反映を検討する。物神崇拜における現実の「取り違え」の根拠として、労働生産物が商品形態をとることによる「物件の人格化と人格の物件化」を重視する点は、人間を物件への依存から解放する「人間の社会」の歴史的意義の究明につながっていく。

第8章「弁証法と矛盾」は、マルクスの弁証法にとって矛盾は「核心的な概念」であるとの立場から、商品交換における矛盾と貨幣の生成、資本の一般的定式の矛盾と労働の搾取から資本主義的蓄積の歴史的傾向まで、『資本論』が分析した様々な矛盾の「具体的な姿」を検討した上で、そこに現れる弁証法的矛盾の本質を「①実在と意識における諸契機の相互前提と相互排除の中で、②当の実在や意識の自己否定が起こり、③これが運動と発展の原動力になる」と要約する。そして、かつての矛盾論争を念頭して、弁証法的矛盾と形式論理的矛盾の関係が整理される。

第四の『資本論』の社会哲学については、第9章「自由、平等、協同」で、マルクスが早くも『ドイツ・イデオロギー』の段階で「人格的自由」を各人の素質のあらゆる方向への発展ととら

え、その実現に必要なものとして社会的「協同」の前進および「協同社会」(Association)の実現を求めるという視角を後年まで貫いていったこと、また第10章「家族と市民社会」ではマルクスが家族の分析を「放棄」するどころか、逆に人間社会の「本源的な歴史的關係の四つの契機」の一つとして重視し、『資本論』でも資本と労働者家族の関係を多面的に分析していることを具体的に紹介する。

つづく第11章「物神崇拜、物件化、疎外」は「人間の社会」論にさらに新たな視角をつけくわえる。資本主義の変革と「将来社会」の実現は、「人間を何から解放する」ものかという根本的な問いを立て、著者は『資本論』が、①人間の自己疎外からの解放、②人格の物件への依存・従属からの解放、③ブルジョア社会にかわる「協同社会」「人間の社会」としての共産主義の実

現を解明したとする。そして、この「物件」(Sache)を「物象」と訳すことは、それがカントやヘーゲルによる「物件」論の批判的継承であることをとらえられなくする誤りだと述べ、他方で、階級闘争の理論と切り離されれば、これらの議論はマルクスの人間解放思想に正しく位置づけられなくなるとも指摘する。マルクスを「物象化論」を主軸として読む試みへの貴重な問題提起である。

最後の第12章「資本主義社会の矛盾と将来社会」では、資本主義の矛盾を重層的に把握した上で、個人の自由な発達を「根本原理」とする「将来社会」の特質、労働者階級がそれを獲得した時点での政治権力の課題、共産主義社会における自由・平等・協同などを総括的に論じている。ここでいわゆる「否定の否定」によって再建される生活手段の「個人的所有」が、各人の

人間的發達の保障としての意味をもち、『ゴータ綱領批判』での共産主義の二段階論はそうした視角から人間的發達の物的条件をめぐる「平等」の發展を論じたものとされている。これもまた重要な問題提起である。

以上に紹介した諸点を中心に、本書は評者にとって大変多くの知的刺激を与えてくれる一冊だった。ことはマルクスの解釈にとどまらず、その変革に挑まねばならない現代資本主義の正確な理解に直結している。本書への補足も含むという直近の同著『マルクスと個人の尊重』（本の泉社、二〇一九年）とあわせて、多くの研究者に検討されることを期待したい。

（いしかわやすひろ・神戸女学院大学・経済学）